

ワークステーションの有用性について

～ 上半規管裂隙症候群 ～

高山赤十字病院 放射線科

○田中志保里 古町彰 田中知哲 今井丈晴 山口忠夫

【はじめに】

当院でのワークステーションを使用した画像が診断に有用であった症例を報告する。

【使用機器】

- ・ TOSHIBA Aquilion64
- ・ AZE Virtual Place Lexus

【ワークステーションの使用内容】

血管系の作成がほとんどであり、主に術前の診断や計画、術後のフォローアップの目的で使用することが多い。

整形外科系では、主に患者説明用に骨や腱の VR 像を再構成する。

その他、腹腔内脂肪測定、脳外科や乳房の術前計画に使用することもある。

【症例】

- ・ 患者：3歳 男性
- ・ 主訴：毎日突然「ぐらぐらする」と言って、机の下に隠れたりパニックになったりする。初期の検査の結果、外傷性の疾患は考えにくく、内耳系の疾患を疑い脳外科から耳鼻科へ紹介受診。その後、内耳腔 CT を施行した。

【結果】

初期診断では、右上半規管裂隙症候群疑いとなった。

内耳腔 CT では、Axi 像のみでは確定的な診断ができず、Cor 像でも欠損部位は確認できたが確定はしづらかった。そこで、VR 像をさらに薄いスライスで表示したところ、欠損部位が見やすく、より確定的な診断をするのに有用な画像となった。

【まとめ】

今回の症例では、通常の MPR 画像では診断がしづらかった。ワークステーションを使用し VR 画像で表示させたことで、より分かりやすく診断に有用な画像を提供することができた。